第57回

出雲谷の会

地唄　石橋　出雲　蓉

音源　川瀬白秋

語り舞　末摘花　出雲　草

岡本一彦 台本
出雲　蓉 振付

演奏　大坪正秋

地唄　葵の上　出雲　蓉

演奏　藤井泰和

地唄　石橋

〽牡丹に戯れ獅子の曲　実に石橋の有様は
笙歌の花降り簫笛琴箜篌　夕日の雲に聞ゆべき
目前の奇特あらたなり
〽暫く待たせ給へや　影向の時節も
今幾程によも過ぎじ
〽獅子団乱旋の舞楽のみぎん　獅子団乱旋の
舞楽のみぎん　牡丹の英にほひ満ち〳〵
大巾利巾の獅子頭　打てや囃せや牡丹芳　牡丹芳
黄金のずい顕はれて　花に戯れ　枝に臥し転び
実にも上なき　獅子王の勢ひ
靡かぬ草木もなき時なれや　万歳千秋と舞納め
万歳千秋と舞納め　獅子の座にこそ直りけれ

語り舞　末摘花　挿入歌／地唄　菊の露

〽鳥の声　鐘の音さへ身に沁みて
思ひ出すほど　涙が先へ

（中略）

〽思はじな　逢ふは別れと言へども愚痴に
庭の小菊のその名に愛でて
昼は眺めてくらしもせうが
夜よるごとに置く露の
露の命のつれなや憎や
今はこの身に秋の風

地唄　葵の上

「三つの車に法の道　火宅の門や出でぬらん」
〽げに世に有りし古へは　雲上の花の宴
春の朝の御遊になれ　仙洞の紅葉の秋の夜は
月に戯れ色香に染み　華やかなりし身なれども
衰へぬれば朝顔の　日陰まつ間のありさまに
只いつとなき我心　もの憂き野辺の早蕨の
萌へ出で初し思いの露　かかる恨みはうき人の
何を嘆くぞ葛の葉の　もつれもつれてな
逢ふ夜はほんに　憎くや憎くやは鳥鐘ばかり
外に妬みはな　無きそななきそ
なんなん菜種の仮寝の夢の　我は胡蝶の花摺衣
袖にちりぢり露涙　ぴんと拗ねても離れぬ対
おお　それ　それよまことにはなれぬつがい
辛気昔の仇枕
「いいや　いかにいふとも　今は打たでは叶ふまじと
枕に立ちよりちゃうと打てば」
〽此の上はとて立ち寄りて
〽今の恨みはありし報　瞋恚の焔は身を焦す
思ひ知らずや思ひしれ　恨めしの心や
あら恨めしの心や　人の恨みの深くして
憂き寝に泣かせ給ふとも　生きてこの世にましまさば
水暗き沢辺の蛍の影よりも　光る君とぞ契らん
妾は蓬生のもとあらざりし身となりて
葉末の露と消えもせば　それさへ殊に恨めしや
夢にだに還らぬものは我契り　昔語りとなりぬれば
なほなほ思ひの増鏡　その面影の恥しや
枕にたてる破れ車　うち乗せかくれ行かんとて
いふ声ばかりは松吹く風　いう声ばかりは松吹く風
さめてはかなく成りにけり